榮＝元榮を以てこの東陽王に該當せしむるに躊躇しない。從つて晉の永和九年、また秦の建元二年頃から漸次開かれた敦煌の千佛洞が、其の後著しく規模を擴大するに至つたのは卽ち此の時代（建平公と東陽王とを二人と見れば）か、若しくは此の時代が其の一つである（建平公と東陽王とを一人と見れば宜しい譯である。更めていふまでもなく、千佛洞は此の時代の前にも後にも漸次增築修補せられたもので、以後のものについては言ふまでもないが、この以前に屬するものとしては、劉宋元嘉二年（425 A. D.）の題銘が陳萬里氏の所謂第九〇洞に存する（北京大學研究所國學門實地調査報告、西行日記一四三頁）が如きは其の一例である。かゝる增修の中で、東陽王當時の造營が特に後世に傳へらるゝ程著しいものであつたに違ない。佛洞の壁畫や佛像または其の他の裝飾などに、北魏の樣式を帶びるものゝ少くない事實は、かく東陽王の時代を定め得ることに於て、益々適切な說明を與へ得ることゝ思ふ。中興二年から六年目七年目に當る大統四年五年などの題銘を有する佛洞（西行日記一四一頁）などは、東陽王の佛洞增修に盡力した記念と認むべきであらう。

東陽王元太榮＝元榮の世系經歷等に就いては今の自分には全く知る所ないのであるが、元氏を稱する以上宗室の系に屬するものなることは言ふまでもない。前に述べた東陽王丕の二子隆・超等が誅せられ丕は庶人となされた時に、魏書の丕の傳に據ると、「其後妻二子聽隨隆・超母弟及餘庶兄弟皆徙敦煌」と見えて居る。或は思ふに元太榮は此の時敦煌に從つた丕の一族中の人で、後に永安二年に至つて公けに先世の爵を襲ふて東陽王に封ぜらるゝに至つたのではあるまいか。前に引いた孝昌二年の觀世音經の奥書に、尹波が主人東陽王の爲に祈願して、「皇途尋開、早還京國、敷暢神譏（機）、位昇宰輔」と記して居るのによりて考へると、この東陽王なる人は瓜州刺史の如き任に